試し読み

ブラジャーとパンティを
つけた彼は浮気者

一

不自由ない家庭に恵まれて、妬まれないほど高校では成績優秀。
友人関係は良好だし、みんなが羨むような、顔よし性格よしの彼女もいる俺は勝ち組だ。

とくに従順で健気な彼女は「童貞卒業」など性の悩みに悶える年ごろには、ありがたい存在。
もう一年くらい週一二回のデートとエッチをつづけ、毎度毎度「わたしは、とても幸せ者ね」「シノくんほど誠実で愛情深い人はいないわ」と彼女はご満悦で褒めてくれる。

といって、この地位を築き維持ずるのに、俺はさほど努力をしていない。

要領がよく、空気が読めて、機転が利くのは昔から。
なんでも、そつなく物事をこなすことができ、悩んだり恥をかいたり落ちこんだりすることは、ほぼ、なかった。

なんて説明すると「けっ」と唾を吐かれそうだが、いいことばかりでもないのだ。
さほど労力をかけずとも自分の都合よく物事をすすめられる分、人や物に執着や情熱を持てないという弊害が。

まわりが苦境を打開しようと懸命にあがくさまを見ると、羨ましくあり、虚しくなる。

「絶望的状況になれば、俺も遮二無二にられるのだろうか」とたまに破壊衝動に駆られるものの、自ら身の破滅を招くほどの勇気はなく。

そうした、やるせない思いが溜まれば、暴走しかねないものの、予防策はばっちり。

昔からリスクが低い方法で、破壊衝動を発散させたもので。

今、破壊衝動を発散させているのは、隣の家に住む幼なじみ、タカシ。

彼女とつきあいだしたとほぼ同時に、肉体関係をもつように。

タカシの家は近くだし、親が共働きで夜も不在なのが都合がいい。

なにより、俺が彼女もちと知っていても、不平不満を一言も垂れないし、口が堅いし。

今夜も今夜とて、気がねなく夜の八時過ぎにインターホンを鳴らして、お宅訪問。

「親戚からプリンをもらったんだ」と箱を差しだせば「じゃあ、二階の俺の部屋で食べよう」と階段を上っていって。

部屋にはいり、テーブルを挟んで座り「いただきます」とタカシが合掌し、プリンを口に持っていこうとしたところ。

にわかに俺はそのプリンを叩き落とした。

「ああ！」と悲痛な声をあげて、ちらばるプリンに向かい、うな垂れるのにかまわず「タカシ、おまえ」と声にどすを利かす。

そのソバに膝立ちになり、生唾を飲みこみ、震える白い尻に手のひらを打ちつけてパアン！
「うああ！」と唸り声をあげるも、逃げようとせず、なんなら尻を高く突きあげて。
「もしかして、南条はおまえがブラジャーとパンティーつけているの知っているんじゃないか？」
「そ、そんな、ことは、な、うひいい！」
「だって、まえに、おまえが高熱をだしたとき、だれも気づかなかっ

たのに、顔を見たとたん保健室に引っぱっていったんだろ？
それだけ目ざといなら、おまえの服の下を見ぬいても、おかしくないだろ？ん？どうなんだ？」

「あひいい！は、はあ、ち、ちが、と思う！
知って、た、ら、俺に、親切、して、くれ、な、くあああ！」

「むしろ自分だけの秘密にして、気づいていないおまえを、やにやしながら眺めていたりしてな？」

「な、な、南条、は、そんな、やつ、じゃ、ひぎいい！」

「そんなやつじゃないって？
へえ、仲のよろしいことで。

じゃあ、おまえが、南条にじっと見られて、下着のことがばれていると妄想して、股間を疼かせているとか？
あんぱんを咥えたときも、南条のをしゃぶるのを想像して・・・」

「あぐうう！ちが、の、なんじょ、は、下着、知ったら、きっと、嫌悪、する！
もう、二度と、俺と、口、利いて、くれ、あああう！」

肌の色素が薄いから、尻が真っ赤に腫れてイタイタしい。
が、俺は哀れむどころか、鼻血を噴きそうに興奮し「そうだよなあ」と嘲笑。

「男にお尻をぺんぺんされて、パンティを濡らしているやつなんか、

さすがのお節介な南条も見放すだろうなあ」

パンティの裾を引っぱれば「あふううん！」と甘えるように鳴き、腰を揺らめかす。

荒い息を飲みこみ「おまえを、かわいがってやれるのは、俺くらいだ？そうだろ？」とパンティを引っぱったまま、一段と強く尻をパアン！

「ひにゃあああ！」と泣き叫び、床に散らした白濁の液体。

ぐったりとうつ伏せに倒れるのを、鼻を鳴らして見下ろしながら、自分のズボンをくつろげて。